

大学における宗教教育の効果¹⁾

The effects of religious education
on faith, death perspectives, self-esteem,
and emotional empathy in universities

渡 部 美穂子・金 児 暁 嗣

目 的

2006年に改正された教育基本法では、大学の目的が新たに規定され、生命や自然の尊重とともに自他の敬愛と共生を教育目標として掲げている。相愛大学の建学の精神であり、大学の名称の由来となった「當相敬愛」は、まさにこの目的に合致するものであり、中でも卒業のための必修科目として提供されている「建学の精神」および「仏教思想と現代」は、改正教育基本法のいう「豊かな情操と道徳心を備えた人格を形成し、心身ともに健康な国民の育成を目指す」大学教育の根幹の役割を担っているものと位置づけられる。さらに、相愛大学では、入学時の本山参拝をはじめとして各種法要や礼拝などの大学諸行事を通して、学生は折にふれ宗教教育の機会に恵まれている。

問題は上記の建学の理念が単なる謳い文句に終わることなく、理念の具現化が果たされ、それが十分に機能しているかということである。このこ

1) 本研究は、財団法人本願寺派教学助成財団による平成22年度教学研究資金の助成を受けた。研究課題名：「大学生への宗教教育と死の準備教育の効果」（研究代表者 金児暁嗣）

調査の実施にあたっては、相愛大学の泉貴子氏、奥野浩之氏、黒坂俊昭氏、長谷川精一氏、水野浄子氏のご協力を賜った。記して感謝申し上げます。

とは相愛大学の存立の基盤にかかわることであり、実証的な調査研究を急務としている。本稿の目的はここにある。

そこでまず、宗教教育が宗教的態度や宗教行動に対して意図した変化をもたらすのかどうかの問題となるが、この点について検討した石黒・酒井・山田（1985）によれば、曹洞宗系の高校の生徒を対象とした調査研究で、宗教教育が、仏（神）の存在と靈魂の不滅を信じること、信仰による救済およびそれに関与する寺院（神社）の役割を認めることにつながり、さらに宗教的実践の増大をもたらすことが示されている。同様の原理が働くとすれば、相愛大学における宗教教育を目的とした科目「建学の精神」および「仏教思想と現代」の単位取得や宗教行事への参加度に応じて、宗教への肯定的態度の醸成や宗教行動への関与が期待される。

ところで、宗教以外の側面において、宗教教育の効果を直接検討した研究は、本邦ではほとんど見当たらないが、その効果を傍証する研究はいくつか存在する。たとえば金児・渡部（2003）では、大学生を対象とした調査から、宗教行動や宗教との関わりは宗教観を媒介することで望ましい死への態度（死への肯定的態度）の形成に影響していることが明らかにされている。大学生にとって、死の問題に触れる機会があり、それを深く考察することは、豊かな人格形成と精神的健康に大いに資することであろう。老年期にある人たちについても、浄土真宗門徒を対象とした研究で同様の結果が得られている（川島，2005）。河野（2011）は自身の研究も含め、宗教と死に関する多くの研究を概観し、不安や恐怖など死にまつわる問題の解決をとおして、精神的な安寧が得られるとしており、また、藤井（2004）は、高齢者の QOL（Quality of life）を考える際の死の問題の重要性を指摘している。これらのことから、宗教と不可分の関係にある死の問題への対処の仕方、あるいは死に対する態度を宗教の効果として取り上げることに意義があると思われる。

また、宗教教育が教育基本法に掲げられている「利他」と「共生」という理念の具現に資するとすれば、その教育の有無によって共感性や自尊心のあり方にも影響を及ぼすものと思われる。共感性は認知的共感性と情動的共感性に大別されるが、ここでは宗教的情操と関係が深いと思われる情

動的共感性を取り上げる。情動的共感性とは、「他者が情動状態を経験しているかまたは経験しようとしていると知覚したために、観察者にも生じた情動的な反応」(Stotland, 1969)と定義され、Mehrabian & Epstein (1972)がそれを尺度構成したものの日本語版が、加藤・高木(1980)によって作成されている。

自尊心は自己に対する評価感情で、自分自身を基本的に価値あるものとする感覚である。自分を肯定的に評価することによって人は満足感を持ち、自己に対しても他者に対しても受容的でありうるという意味で精神的健康や適応の基盤となる。たとえば、自尊心の強い人は同調への圧力に屈することなく、麻薬を常用することが少なく、困難な課題にも粘り強く取り組み、孤独でないことが明らかにされている(Crocker & Wolfe, 1999; Leary, 1999; Tafarodi & Vu, 1997)。自尊心は内発的宗教²⁾と有意な正の相関がある(Batson & Ventis, 1982)。なぜなら、内発的宗教は自己を内省せしめ、全体的な自己の確立を促すからである。したがって、そのような宗教教育を受講している相愛大学やプロテスタント系の大学の学生は、そうでない学生に比べて自尊心が高いことが予想される。

以上の目的を達成するために本研究では、相愛大学及び他の私立大学(宗教教育を行っている大学と行っていない大学を含む)の学生を対象に、宗教教育の有無が宗教行動、宗教観、死生観に違いをもたらしているかどうかを検討し、次いで、宗教教育が信仰実践的な宗教行動を促し、ひいては肯定的な宗教観や死生観、情動的共感性、自尊心などを育む可能性を検討することを目的とする。

2) 人の性格が十人十色といわれるように、宗教への接し方も様々である。こうした種々の信仰スタイルを特徴づけるのが宗教的志向性(religious orientation)であり、そのうちもっとも有名なものの一つがオルポート(Allport, 1966)による内発的宗教(intrinsic religion)と外発的宗教(extrinsic religion)の分類である。これは、信仰理由がその人の内部にあるか、外部にあるかによって判断されるものである。オルポートとロス(Allport & Ross, 1967)は「外発的に動機づけられた人は宗教を利用する(uses)が、内発的に動機づけられた人は宗教を実践する(lives)」と述べ、宗教的情操の分化の程度が宗教的志向性を規定するとした(金児, 1997, p.47)。

方 法

調査対象者 相愛大学を含む関西圏にある4つの私立大学の学生825名に対して、平成23年4月～5月の授業時間内に集合調査形式で調査を実施した。表1に示したA大学は、キリスト教の教えに基づく「自由と愛の精神」を、B大学はキリスト教主義とともに自由主義、国際主義を建学の精神として掲げている。C大学では「自由と清新」を建学の精神としており、宗教系の大学ではない点で他の3大学とは異なる。

質問紙 質問紙は、配布段階で大学別にコード番号を付記しておき、性別や年齢、回生といった個人内変数とともに、宗教教育の有無、宗教行動、宗教観、死に対する態度、情動的共感性、自尊心などについて問う項目で構成された。それぞれの質問内容の詳細については、以下の通りである。

個人内変数 年齢、性別（1：男性、2：女性）、回生（1回生～4回生）について尋ねた。

宗教教育の有無 本研究では、大学において宗教に関する授業を受講したことがあるかどうかを質問し、それを変数とした（1：ない、2：ある）。相愛大学では卒業に関わる必修科目として、1年次、2年次にそれぞれ1科目ずつ広く宗教や仏教、とくに浄土真宗を中心とした宗教関連科目が提供されている。他の3つの大学では主に、一般教養科目として宗教に関する科目が提供されているものの、必修科目ではないため、履修者は少ないと思われる。

なお、調査時期による差を考慮し、受講は前年度までのものを対象とした。さらに今後の資料として、受講した科目名を記述させたが、本論では分析対象外とした。

宗教行動と宗教観 16項目からなる金児（1994）の宗教行動尺度項目を使用して、諾否法（1：はい、0：いいえ）によって日頃の宗教に関わる行動を問うた。宗教的態度については、渡部・金児（2004）で使用した16項目からなる尺度を使用した。いずれも先行研究で、その信頼性が確認されている。

死観（自己と他者） 自己の死への態度は、渡部・金児（2004）の自己の死観尺度（5 因子、27 項目）を使用した。また、他者の死への態度は、金児・渡部（2003）で構成された他者の死観尺度（9 因子、57 項目）のうち、それぞれの因子に高い負荷を示した 3 項目、合計 27 項目を使用した。これら 2 つの尺度は、自己と近い他者の死への態度の違いを明らかにするために構成されており、基本的に同じ内容の質問文からなっているが、自己の死、他者の死のいずれを問うているのか、という点をわかりやすくするために主語を含めて一部の表現を変更している。さらに、実際に大切な近い他者を亡くした経験があるかどうかを問うたうえで、経験がある回答者に対してはその人の死をどのように捉えているのかを、経験がない回答者に対しては今現在もっとも大切な他者の死をどのように考えているのかを尋ねたという点においても質問項目の表現が一部異なっていた。

情動的共感性 他者の情動や感情に対する共感性の測定には、加藤・高木（1980）が開発した「情動的共感尺度」を使用した。この尺度は 25 項目からなっており、「感情的あたたかさ」（10 項目）、「感情的冷淡さ」（10 項目）、「感情的被影響性」（5 項目）という 3 つの下位尺度から構成されている。それぞれの項目について回答者自身がどの程度そうだと思うかを 6 件法（1：まったくちがう～6：まったくそうだ）で回答させた。

自尊心 Rosenberg（1965）や Coopersmith（1967）が構成した自尊心尺度を参考に、向井・金児・河野・渡部・岸川・堀江・宮崎（2003）が構成した 10 項目からなる自尊心尺度を用いて、5 件法（1：まったくあてはまらない～5：とてもあてはまる）で測定した。得点が高いほど自尊心が高くなるように加算して自尊心得点とした。

結 果

各大学における調査対象者の人数と平均年齢および宗教科目履修の有無は表 1 の通りである。ただし、変数によって回答に不備があったものを除いて分析したため、以下の結果には回答数に変動がある。

表1 各大学の人数と平均年齢と宗教科目履修の有無

	男子	女子	計	平均年齢	SD	履修あり	履修なし
相愛大学 (仏教系、浄土真宗)	96	265	361	19.5	1.41	272	88
A 大学 (プロテスタント系)	100	87	187	18.4	0.99	21	167
B 大学 (プロテスタント系)	66	63	129	20.6	1.29	73	56
C 大学 (非宗教系)	70	71	141	19.4	1.07	21	119
全体	332	486	818	19.4	1.41	387	430

表1 からわかるように、大学によっては宗教科目を履修したことのあ
る学生数がきわめて少ないため大学毎に分析することはせず、本研究で分
析対象とした各変数について、性別、宗教教育の有無ごとに平均値と標準
偏差を算出して表2 に示した。それぞれの変数の算出方法については、
以下に詳述する。

宗教行動 先行研究 (金児, 1997; 金児・渡部, 2003; 渡部・金児,
2004) の結果をふまえ、「おみくじ、易、占い」、「祈願」、「お守り・おふ
だ」、「初詣」の4種の行動を現世利益行動得点 (得点範囲: 0~4)、「墓

表2 各変数の尺度得点、因子得点の平均値、標準偏差および分散分析結果

	宗教教育の有無						分散分析結果 ⁵ 性別・教育	
	なし		あり		計			
宗教行動 ¹	Mean(SD)	N	Mean(SD)	N	Mean(SD)	N		
現世利益	男子	2.24(1.36)	201	2.21(1.33)	130	2.23(1.35)	331	
	女子	2.61(4.30)	229	2.59(1.24)	256	2.60(1.27)	485	
	計	2.43(1.34)	430	2.46(1.28)	386	2.45(1.31)	816	男子<女子***
慰霊	男子	1.94(1.37)	201	1.92(1.32)	130	1.93(1.35)	331	
	女子	1.87(1.33)	229	1.96(1.24)	256	1.92(1.28)	485	
	計	1.90(1.35)	430	1.95(1.27)	386	1.90(1.31)	816	
信仰実践	男子	0.19(0.70)	201	0.19(0.60)	130	0.19(0.66)	331	
	女子	0.24(0.72)	229	0.46(1.14)	256	0.36(0.91)	485	男子<女子**
	計	0.21(0.71)	430	0.37(0.93)	386	0.29(0.82)	816	なし<あり*
宗教観 ²								
向宗教性	男子	-0.11(1.12)	193	-0.11(1.06)	125	-0.11(1.04)	318	
	女子	0.07(0.86)	219	0.09(0.90)	246	0.08(0.88)	465	
	計	-0.02(0.94)	412	0.02(0.96)	371	0.00(0.95)	783	男子<女子**
加護観念	男子	-0.20(0.94)	193	-0.17(1.03)	125	-0.18(0.98)	318	
	女子	0.05(0.87)	219	0.18(0.85)	246	0.12(0.86)	465	
	計	-0.06(0.91)	412	0.07(0.93)	371	0.00(0.92)	783	男子<女子***
靈魂観念	男子	-0.19(1.00)	193	-0.30(1.03)	125	-0.24(1.01)	318	
	女子	0.07(0.78)	219	0.24(0.74)	246	0.16(0.76)	465	男子<女子***
	計	-0.05(0.90)	412	0.06(0.89)	371	0.00(0.89)	783	男子あり<女子あり*

自己の死観 ²								
恐怖と苦痛	男子	-0.09(1.00)	183	-0.16(1.04)	124	-0.11(1.01)	307	
	女子	0.13(0.89)	216	0.03(0.92)	239	0.07(0.90)	455	
	計	0.03(0.94)	399	-0.04(0.96)	363	0.00(0.95)	762	男子<女子**
消滅	男子	-0.01(0.96)	183	-0.08(1.00)	124	-0.04(0.97)	307	
	女子	0.13(0.81)	216	-0.07(0.86)	239	0.03(0.84)	455	
	計	0.06(0.88)	399	-0.07(0.91)	363	0.00(0.90)	762	なし>あり*
生の証	男子	0.01(0.96)	183	0.08(0.99)	124	0.04(0.97)	307	
	女子	-0.06(0.85)	216	0.01(0.89)	239	-0.02(0.87)	455	
	計	-0.03(0.90)	399	0.04(0.92)	363	0.00(0.91)	762	
逃避と未知	男子	0.03(0.98)	183	0.03(0.95)	124	0.03(0.97)	307	
	女子	-0.01(0.78)	216	-0.03(0.89)	239	-0.02(0.84)	455	
	計	0.01(0.88)	399	-0.01(0.91)	363	0.00(0.89)	762	
浄福な来世	男子	-0.10(1.01)	183	-0.27(0.97)	124	-0.17(0.99)	307	
	女子	0.16(0.80)	216	0.08(0.83)	239	0.12(0.81)	455	
	計	0.04(0.91)	399	-0.04(0.89)	363	0.00(0.90)	762	男子<女子***
他者の死観 ²								
恐怖と苦痛	男子	-0.23(0.96)	136	-0.22(0.95)	88	-0.23(0.95)	224	
	女子	0.14(0.88)	164	0.14(0.90)	195	0.14(0.89)	359	
	計	-0.03(0.93)	300	0.03(0.93)	283	0.00(0.93)	583	男子<女子***
消滅	男子	0.02(0.94)	136	0.20(1.03)	88	0.09(0.98)	224	
	女子	0.06(0.86)	164	-0.14(0.82)	195	-0.05(0.84)	359	
	計	0.04(0.89)	300	-0.04(0.90)	283	0.00(0.90)	583	男子あり>女子あり*
浄福な来世	男子	-0.15(1.02)	136	-0.22(1.01)	88	-0.18(1.02)	224	
	女子	0.05(0.77)	164	0.15(0.83)	195	0.10(0.80)	359	
	計	-0.04(0.90)	300	0.04(0.90)	283	0.00(0.90)	583	男子<女子***
人生の集大成	男子	-0.10(0.92)	136	-0.02(0.96)	88	-0.07(0.93)	224	
	女子	-0.02(0.82)	164	0.10(0.84)	195	0.01(0.83)	359	
	計	-0.05(0.86)	300	0.06(0.88)	283	0.00(0.87)	583	
未知と逃避	男子	0.02(0.91)	136	0.10(0.93)	88	0.05(0.92)	224	
	女子	0.03(0.84)	164	-0.08(0.87)	195	-0.03(0.85)	359	
	計	0.03(0.87)	300	-0.03(0.89)	283	0.00(0.88)	583	
生の証	男子	0.01(0.99)	136	-0.28(0.95)	88	-0.10(0.98)	224	
	女子	0.06(0.87)	164	0.06(0.90)	195	0.06(0.88)	359	
	計	0.04(0.92)	300	-0.04(0.93)	283	0.00(0.93)	583	男子<女子*
共感性 ³								
あたたかさ	男子	4.07(0.82)	172	4.29(0.65)	117	4.16(0.76)	289	
	女子	4.32(0.70)	213	4.54(0.64)	236	4.44(0.68)	449	男子<女子***
	計	4.21(0.77)	385	4.46(0.65)	353	4.33(0.72)	738	なし<あり***
冷淡さ	男子	2.84(0.75)	175	2.71(0.71)	122	2.79(0.74)	297	
	女子	2.67(0.68)	221	2.52(0.74)	239	2.59(0.72)	460	男子>女子***
	計	2.75(0.72)	396	2.58(0.74)	361	2.67(0.73)	757	なし>あり**
被影響性	男子	3.49(0.74)	174	3.58(0.88)	122	3.53(0.80)	296	
	女子	3.80(0.84)	221	3.84(0.81)	240	3.82(0.82)	461	
	計	3.66(0.81)	395	3.75(0.84)	362	3.70(0.83)	757	男子<女子***
自尊心 ⁴	男子	3.15(0.63)	195	3.13(0.77)	125	3.14(0.69)	320	
	女子	2.92(0.65)	227	2.99(0.69)	251	2.95(0.67)	478	
	計	3.02(0.65)	422	3.03(0.72)	376	3.03(0.68)	798	男子>女子***

¹ 当該宗教行事に従事していると答えた数

² 因子得点

³ 尺度得点 (1:まったくちがう~6:まったくそうだ)

⁴ 尺度得点 (1:まったくあてはまらない~5:とてもあてはまる)

⁵ *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

参りをする」、「祖先や肉親の霊をまつる」、「仏壇にお花やお仏飯をそなえる」、「神棚にお花や水をそなえる」の4つの行動を慰霊行動得点（得点範囲：0～4）、「礼拝やおつとめ、布教などをする」、「宗教関係の新聞やパンフレット読む」、「信仰グループや奉仕グループに参加している」といった6つの行動を信仰実践行動得点（得点範囲：0～6）とした。

3つの宗教行動について、性別と宗教教育の有無を要因とした分散分析を行った結果、現世利益行動では性別（ $F = 15.5$, $df = 1/812$, $p < .001$ ）の主効果、信仰実践行動では性別（ $F = 7.3$, $df = 1/812$, $p < .01$ ）と宗教教育（ $F = 3.9$, $df = 1/812$, $p < .05$ ）の主効果が認められ、男子学生より女子学生のほうが現世利益行動と信仰実践行動を多く行っており、宗教教育を受けた学生のほうが信仰実践行動得点は高いことが明らかとなった。いずれの変数に関しても、交互作用はみられなかった。

宗教観 すでに述べたとおり、宗教観尺度についてはすでに筆者らによる多くの先行研究で標準化がなされているが（例；金兎，1997）、本研究でも因子分析によって、その構造と信頼性の確認を行った。使用した19項目について、主因子法、プロマックス回転による因子分析を施した結果、最終的に12項目を採用し、3因子（向宗教性、加護観念、靈魂観念）を抽出した。この結果を、表3に示した。それぞれの因子に負荷している項目を見ると、先行研究と同様の因子構造を有していることは明らかであり、詳細な因子の解釈については割愛する。

これら3つの宗教観については高い相関関係が認められたため、因子得点を算出して性別と宗教教育の有無を要因とした分散分析を行った結果、すべての宗教観について性別の主効果が認められ（向宗教性： $F = 7.10$, $df = 1/779$, $p < .01$ 、加護観念： $F = 19.89$, $df = 1/779$, $p < .001$ 、靈魂観念： $F = 39.37$, $df = 1/779$, $p < .001$ ）、男子学生よりも女子学生のほうが宗教的態度が強いことが示された。また、靈魂観念については性別と宗教教育の交互作用（ $F = 4.66$, $df = 1/779$, $p < .05$ ）が認められ、男子では宗教教育を受けているほうが靈魂観念が弱いものに対して、女子では宗教教育を受けた学生のほうが靈魂観念は強いという結果であった。

自己の死観 27項目の自己の死観尺度項目について、因子分析（主因子

表3 宗教観項目因子負荷行列表（主因子法、プロマックス回転）

項目番号	I	II	III	Mean (SD)
I：向宗教性				
16 よい生活を送るためには、何らかの宗教的信仰が必要である	.964	-.059	-.074	2.80 (1.18)
17 信仰をもつことによって、人生の目標が与えられる	.814	.103	-.105	2.91 (1.16)
15 信仰に裏打ちされた生き方こそ、人の真の生き方である	.685	-.085	.203	2.95 (1.11)
10 どんなに科学が進んでも、人間は信仰がなければ幸せになれない	.519	.016	.157	3.04 (1.22)
II：加護観念				
7 神社の境内にいと心が落ちつくことがある	-.136	.883	.001	3.70 (1.24)
6 お寺、神社、教会などから安心感を得ることができる	.034	.783	.024	3.73 (1.23)
18 観音さんやお不動さんに親しみを感じる	.305	.552	-.083	3.05 (1.18)
3 お盆などの昔からの宗教的行事には親しみを感じる	-.003	.480	.117	3.98 (1.11)
III：靈魂観念				
14 神や仏をそまつにするとばちがあたる	.012	.057	.734	4.32 (1.26)
9 人は死んでも、繰り返し生まれ変わるものだ	-.035	-.017	.658	3.64 (1.38)
13 死後の世界はあるように思える	.090	-.058	.630	3.79 (1.33)
8 死者の供養をしないとたたりがあると思う	-.013	.138	.561	3.78 (1.30)
因子間相関				
	II	.47		
	III	.48	.51	

削除項目（7項目）

1. 祖先崇拝は美しい風習である
2. 宗教によって、自己の存在の意味が教えられる
4. 宗教は心身のよい修養になる
5. お盆のときに、先祖の霊は子孫の家に帰ってくる
11. 仏様や神様を信じて願いごとをすれば、いつかその願いごとがかなえられる
12. 氏神の祭りは、地域の結びつきを高めるのに必要である
19. 既成の古い宗教よりも新しい宗教に魅力を感じる

法、プロマックス回転）を施したところ、6因子目に急激な固有値の低下が見られた。そこで、負荷量や共通性が低い、あるいは単純構造を阻害する項目を削除しつつ因子分析を繰り返し、最終的に表4に示す結果を得た。

本研究で抽出された因子は、渡部・金児（2004）とほぼ同じものである。第1因子は、自己の死を恐ろしく苦しいものととらえる「苦痛と恐怖」、第2因子は死ねば消え去ってしまうと考える「消滅」である。第3因子は、「死ぬ時に、何かこの世に自分で納得のゆく大きな意味を残せるように精一杯生きたい」という項目に代表されるような、自らの死に積極的な意味を付与する態度を表す「生の証」と命名した。第4因子は、自分の死はよくわからないものであり、その問題から逃避するという「逃避と未知」、第5因子は、死後には別の生が待っていると考える「浄福な来

表 4 自己の死観項目因子負荷行列表（主因子法、プロマックス回転）

項目番号	I	II	III	IV	V	Mean (SD)
I：恐怖と恐怖						
21 私の死は、私にとって最大の恐怖である	.843	.030	.035	-.044	-.071	3.66 (1.59)
7 死は、私にとって最後の苦しい瞬間である	.802	-.001	-.080	.060	.028	3.44 (1.43)
5 私の死の瞬間を考えると息がつまる	.771	-.097	.012	-.151	.032	3.40 (1.47)
25 私の死について考えると無性に恐ろしくなる	.744	-.031	.079	-.149	.010	3.46 (1.42)
3 私にとって、自分自身の死とは最後の不幸なできごとである	.705	-.044	-.044	.124	.044	3.35 (1.44)
18 死は、私にとって苦しい究極の姿である	.647	.145	-.136	.075	.113	2.99 (1.34)
II：消滅						
11 死後、時間とともに私の存在は帳消しになっていく	-.143	.688	.101	-.033	.046	3.41 (1.42)
12 私は死ぬことによってすべてを失う	.193	.633	-.042	-.035	.071	3.09 (1.47)
27 死とは私が永久になくなってしまふことである	.171	.606	.010	.024	-.147	3.49 (1.41)
26 私が死んでもまわりの状況は何ひとつ変わらない	-.157	.605	.007	.019	.080	3.38 (1.32)
14 死は私自身のすべての終わりである	.181	.565	.072	.058	-.080	3.54 (1.49)
III：生の証						
10 死ぬ時に、何かこの世に自分で納得のゆく大きな意味を残せるように私は精一杯生きたい	-.069	.029	.820	.011	-.016	4.72 (1.22)
20 死ぬまでに私は何か生きた証（あかし）を残したい	-.019	.048	.804	-.041	.031	4.62 (1.23)
2 今死ねば、私はあらゆる可能性を試さないままに終わってしまう	.119	-.036	.522	.021	-.035	4.81 (1.20)
19 死は私がどう生きたのかの集大成である	-.125	.101	.476	-.034	.161	3.89 (1.26)
IV：逃避と未知						
15 私の死について真剣に考えることはあまりない	-.060	-.029	-.135	.683	.108	3.47 (1.44)
17 私の死についてはよく分らない	.115	-.056	.158	.666	-.125	4.39 (1.27)
23 死がやってくるまで、私の死について考えなくてもかまわない	-.059	.032	-.146	.619	.131	3.44 (1.29)
22 私の死について考えてもしかたがない	-.177	.124	.030	.618	-.017	4.16 (1.42)
16 私の死について考えるのは難しい	.166	-.116	.209	.533	-.080	4.25 (1.27)
V：浄福な来世						
9 死ぬと、私は清められて生まれ変わることができる	.073	-.037	.125	-.020	.797	3.03 (1.27)
4 死ぬと私はまた別の世に生まれ変わって、よい人生を送ることができる	.109	-.067	.131	.054	.719	3.24 (1.28)
24 死ねば私はもっとよい世界へ行ける	-.037	.130	-.113	.044	.574	2.63 (1.12)
因子間相関	II	.43				
	III	.35	-.06			
	IV	.16	.15	.20		
	V	.18	-.10	.02	.04	

削除項目（4項目）

1. 私が死んだからといって、世界が変わるわけではない
6. 私の死は、未知のことからである
8. 死は、私が立派にやりとげなければならぬ重要なできごとである
13. 私の死は、私が人生の素晴らしさを実感できるひとつの機会である

世」である。

先行研究と同じく、高い因子間相関がみられたため（例えば、「苦痛と恐怖」と「消滅」では、 $r = .43$ 、「苦痛と恐怖」と「生の証」では、 $r = .35$ など）、自己の死観の尺度得点として因子得点を使用することとした。5つの因子得点それぞれを従属変数とし、性別、宗教教育の有無を独立変数とした分散分析を行った結果、性別の主効果は「恐怖と苦痛」と「浄福な来世」に認められ、女子のほうが死を恐怖であると受け止める一方で、死

後もこの世とは違った世界があると考えていることが示された。また、宗教教育の効果は「消滅」にみられ、宗教教育のあるほうが自己の死を消滅とは受け止めていないことが明らかとなった。

他者の死観 他者の死観項目は、「これまでに大切な他者を亡くした経験のある人」についてはその亡くなった人に死について尋ね、「その経験がない人」に対しては、「いま現在もっとも大切な人の死」について回答させた。この2群を同じように分析することには問題があること、さらに今回の調査では、回答者の77% (636名) が大切な他者を亡くした経験があることから、本研究ではすでに亡くなった大切な人の死についての回答データを分析対象とした。自己の死観と同様に、27項目について因子分析（主因子法、プロマックス回転）を施したところ、7因子目に固有値の急激な低下がみられた。共通性や負荷量の低い項目、単純構造を阻害する項目を削除しつつ因子分析を繰り返し、最終的に7項目を削除して6因子からなる単純構造が得られた。この結果は表5に示した。

他者の死観もおおむね自己の死観と同じような構造を示しているが、相違点は、「人生の集大成」という因子がみいだされているところである。自己の死観では、「生の証」という因子のなかにこの因子を表す項目がひとつ含まれているが、それはもっとも低い負荷量を示しており、他の項目は因子分析の過程で削除されていた。つまり、自分の死に対してはそれを「どう生きたかの集大成である」と捉える態度が希薄であるが、すでに亡くなった大切な他者の死に対しては「死はその人の集大成であった」と考えているということの意味している。この結果から、自己の死への態度と大切な他者の死への態度の構造は非常に似通っているが、まったく同じではなく、両者を比較する場合には注意が必要である、ということが示された。

他者の死観のうち「生の証」については表現上の問題を指摘することができる。例えば、「死ぬまでに、その人には何か生きた証を残してほしかった」という質問は、「生きた証を残さなかった」という前提が含まれているので、すべての回答者が同じ条件で答えているわけではない可能性がある。この意味で、今後の他者の死観のうち「生の証」については改善が

表 5 他者の死観因子負荷行列表 (主因子法、プロマックス回転)

項目番号	I	II	III	IV	V	VI	Mean (SD)
I：恐怖と苦痛							
5 その人の死の瞬間を考えると息がつかまる	.843	-.058	.001	.081	-.065	-.082	3.94 (1.32)
21 その人の死は、私にとって最大の恐怖であった	.779	.019	-.052	.042	-.022	.034	3.54 (1.45)
25 その人の死について考えると無性に恐ろしくなった	.717	.026	.052	-.036	-.019	.017	3.55 (1.41)
7 死は、その人にとって最後の苦しい瞬間であった	.585	.193	-.005	-.081	-.027	.059	3.49 (1.35)
6 その人の死は未知のことがらであった	.503	-.023	-.042	-.003	.181	.028	3.75 (1.36)
II：消滅							
12 その人は死ぬことによってすべてを失った	.055	.790	.015	-.064	-.049	.046	2.34 (1.24)
14 死はその人自身のすべての終わりであった	.054	.693	.091	-.054	.017	-.058	2.93 (1.38)
27 死とはその人が永久になくなってしまうことである	.137	.591	-.046	.052	.026	-.094	2.97 (1.52)
11 死後、時間とともにその人の存在は帳消しになっている	-.179	.578	-.119	.138	.062	.079	2.17 (1.20)
III：浄福な来世							
9 死んで、その人は清められて生まれ変わることができた	-.038	.086	.785	.068	.043	-.037	3.46 (1.24)
4 その人はまた別の世に生まれ変わって、よい人生を送っているだろう	.047	-.126	.747	-.045	.013	-.057	4.07 (1.35)
24 死んでその人はもっとよい世界へ行けた	-.051	.016	.655	.035	-.046	.144	3.54 (1.28)
IV：人生の集大成							
19 死はその人がどう生きたのかの集大成であった	.025	-.009	-.035	.735	-.032	.107	3.68 (1.32)
13 その人の死は、その人が人生の素晴らしさを実感できるひとつの機会であった	.059		-.076	.000	.733	.019	3.54 (1.30)
8 死は、その人が立派にやりとげなければならぬ重要なできごとであった	-.064	.140	.109	.561	.002	-.035	3.32 (1.21)
V：未知と逃避							
17 その人の死についてはよく分らない	-.010	.047	.016	-.076	.781	.033	3.31 (1.32)
16 その人の死について考えるのは難しい	.179	-.103	.009	.049	.724	.036	3.82 (1.36)
15 その人の死について真剣に考えることはあまりなかった	-.160	.099	-.009	.028	.539	-.082	3.01 (1.47)
VI：生の証							
20 死ぬまでにその人には何か生きた証を残してほしかった	-.038	-.039	-.039	.012	.007	.938	3.32 (1.32)
10 死ぬ時に、何かこの世に自分で納得のゆく大きな意味を残せるようにその人には精一杯生きてほしかった	.123	.011	.105	-.020	-.016	.602	3.79 (1.37)
因子間相関							
	II	.17					
	III	.40	-.03				
	IV	-.03	.03	.32			
	V	.09	.31	.11	.13		
	VI	.35	.29	.28	.15	.25	

削除項目 (7 項目)

1. その人が死んだからといって、世界が変わるわけではなかった
2. その人はあらゆる可能性を試さないままに終わってしまった
3. その人にとって、その人自身の死とは最後の不幸なできごとであった
18. 死は、その人にとって苦しみの究極の姿であった
22. その人の死について考えてもしかたがないと思った
23. 死がやってくるまで、その人の死について考えなくてもかまわないと思っていた
26. その人が死んでもまわりの状況は何ひとつ変わらなかった

望まれる。

さて、自己の死観と同じく、因子間に高い相関関係が認められたため、因子得点を算出して、性別、宗教教育の有無の 2 要因の分散分析を行った。その結果、3 つの死観について性別の主効果が認められ (恐怖と苦

痛： $F = 21.50$ 、 $df = 1/583$ 、 $p < .001$ 、浄福な来世： $F = 13.50$ 、 $df = 1/583$ 、 $p < .001$ 、生の証： $F = 5.95$ 、 $df = 1/583$ 、 $p < .05$ ）、男子よりも女子のほうが亡くなった大切な人の死を恐ろしいものであり、その人は浄福な来世へと旅立ったと考え、生きた証を残してほしかったと捉えていることがわかった。また、「消滅」については交互作用が見られ、宗教教育を受けていない場合には性差が認められないが、宗教教育を受けている場合には、女子はその人の死を「消滅」と考えないのに対し、男子は「消滅」とみなしていることが示された。

情動的共感性 加藤・高木（1980）の分析方法に従い、25項目について因子分析（主成分分析、バリマックス回転）を施したところ、彼らと同様に3つの因子が抽出された。共通性が低い項目や複数の因子に高い負荷を示した項目（3項目）を削除して再度、因子分析を施した。

3つの因子はそれぞれ加藤ら（1980）にならって「感情的あたたかさ」、「感情的冷淡さ」、「感情的被影響性」と命名し、尺度得点を用いて3つの下位尺度を構成した。「感情的あたたかさ」は、「私は贈り物をした相手の人が喜ぶ様子を見るのが好きだ」、「私は映画を見るとき、つい熱中してしまう」、「歌を歌ったり、聴いたりすると、私は楽しくなる」などの10項目で構成されている。「感情的冷淡さ」は、「私は人がうれしくて泣いているのを見ると、しらけた気持ちになる」、「私は他人の涙を見ると、同情的になるよりも、いらだってくる」、「私は友人が悩みごとを話し始めると、話をそらしたくなる」などの8項目からなり、「感情的被影響性」は、「私は他人の感情に左右されずに決断することができる」（反転項目）、「私は友人が動揺していても、自分まで動揺してしまうことはない」（反転項目）、「まわりの人が神経質になると、私も神経質になる」、「私は感情的にまわりの人からの影響を受けやすい」という4項目で構成されていた。因子名の方向にそって3つの尺度得点を算出し、これらの尺度得点について性別と宗教教育の有無の2要因の分散分析を施したところ、性別についてはすべての下位尺度で主効果が認められ、女子は感情的にあたたかく（ $F = 22.23$ 、 $df = 1/719$ 、 $p < .001$ ）、冷淡でもなく（ $F = 8.04$ 、 $df = 1/719$ 、 $p < .01$ ）、被影響性が高い（ $F = 21.86$ 、 $df = 1/719$ 、 $p < .001$ ）

ことが示された。また、宗教教育については宗教教育を受けたほうが感情的にあたたく ($F = 16.85, df = 1/719, p < .001$)、冷淡でない ($F = 3.07, df = 1/719, p < .05$) ことが明らかとなった。

自尊心 自尊心得点について性別と宗教教育の有無の2要因の分散分析を行った結果、性別の主効果のみが認められ ($F = 14.21, df = 1/794, p < .001$)、女子よりも男子のほうが自尊心は高いことが明らかとなった。

大学による諸態度の差異 次に、大学によって、宗教行動や宗教観、死観、情動的共感性、自尊心に違いがあるのかを検討するため、それぞれの変数に対して、性別と大学(4水準)の分散分析を行った。その結果から、大学によって差が認められたものについては以下のとおりである。

まず宗教行動のなかで有意差があったのは、信仰実践行動のみであり、B大学は他の3大学よりも信仰実践得点が高く ($F = 2.39, df = 3/811, p < .05$)、宗教観については、C大学の向宗教性 ($F = 3.63, df = 3/785, p < .01$) と加護観念 ($F = 5.19, df = 3/785, p < .01$) が他の3大学よりも得点が低かった。自己の死観では、「消滅」ではC大学がその態度が強くと ($F = 8.04, df = 3/757, p < .05$)、「生の証」という態度はA大学が希薄であり ($F = 8.04, df = 3/757, p < .01$)、「浄福な来世」観はB大学が希薄である ($F = 8.04, df = 3/757, p < .05$) ことが明らかとなった。また、他者の死観で差がみられたのは「恐怖と苦痛」のみであり、相愛大学とD大学のほうがA、B大学よりも得点が高かった ($F = 9.44, df = 3/577, p < .05$)。さらに、情動的共感性については、A大学が他の3大学よりも「感情的あたかさ」が低く ($F = 5.75, df = 1/719, p < .01$)、相愛大学とB大学のほうが、A大学とC大学よりも「感情的冷淡さ」が低かった ($F = 5.75, df = 1/719, p < .01$)。感情的被影響性については、差は見られなかった。自尊心は、B大学が高いという結果であった ($F = 7.00, df = 3/706, p < .001$)。

宗教観、死観、情動的共感性、自尊心に及ぼす宗教教育の効果 大学における宗教教育が宗教観や死観の醸成を促し、それによって共感性や自尊心に影響を与えているのかを明らかにするため、以下のようなモデルを検証した。まず、個人内変数として性別と宗教教育を受けたか否かが宗教行動

に影響を及ぼし、さらに宗教行動は個人の宗教観を形成して自己や近い他者の死観を規定し、最終的に共感性や自尊心を決定する。ただし、自己と他者の死観は高い相関関係にあることから（例えば、「苦痛と恐怖」では $r = .48$ 、「消滅」では $r = .51$ 、「浄福な来世」では $r = .55$ など）、多重共線性があるため、自己と他者の死観を同時に説明変数としてモデルに投入することは避け、この2つの死観を別々に投入した。このモデルにもとづき、重回帰分析を施した結果が、表6である。

表6より、有意な標準偏回帰係数を得られたものについて以下に述べる。

宗教行動 個人内変数のうち、性別は現世利益行動と信仰実践行動に影響を及ぼしており、女子のほうがいずれの行動にも強く関与していたが、宗教教育は信仰実践行動のみを促進することが明らかとなった。また、個人内変数は慰霊行動を規定していなかった。

宗教観 性別は、加護観念と靈魂観念に影響しており、女子のほうが男子よりもいずれの観念も強いこと、さらに現世利益行動と慰霊行動は3つの宗教観すべてを促進することが示された。また、信仰実践行動は向宗教性のみを規定し、加護観念と靈魂観念には影響を及ぼしていないことが明らかとなった。

自己の死観 個人内変数のうち、性別は「消滅」へは正の、「生の証」へは負の、「浄福な来世」へは正の影響を及ぼしていたが、宗教教育はすべての死観に対して影響を及ぼしていなかった。宗教行動の中で死観をもつとも規定する変数は信仰実践行動であり、「恐怖と苦痛」、「消滅」、「逃避と未知」という否定的死観を和らげることが示された。ただ、「浄福な来世」に対しても負の影響を及ぼしていることは、先行研究とは異なる結果である。現世利益行動は「生の証」という死観を強め、「逃避と未知」という死観を低める方向へ働き、慰霊行動は死観を規定するものではなかった。靈魂観念はすべての死観に影響しているとともに、その規定力も大きく、「消滅」を除いて、否定的死観（恐怖と苦痛、逃避と未知）と肯定的死観（生の証、浄福な来世）の双方に強い正の影響を与えていた。

他者の死観 個人内変数のうち、他者の死観に影響を及ぼしているのは性

表6 重回帰分析結果 (標準偏回帰係数)

	宗教行動			宗教観		死観 (上段は自己、下段は他者、集大成は他者のみ)						共感性		自尊心		
	現世利益	慰霊	信仰実践	向宗教性	加護観念	靈魂観念	恐怖と苦痛	消滅	生の証	逃避と未知	浄福な来世	集大成	あたたかさ	冷淡さ	被影響性	
個人内変数																
性別 (1=男子, 2=女子)	.14***	-.01	.09*	.07	.12***	.18***	.05	.08*	-.13***	-.02	.06*		.15***	-.13**	.13**	-.11**
宗教教育 (1=なし, 2=あり)	-.01	.02	.09*	-.01	.05	.03	-.04	-.06	.03	-.01	-.06	.12**	-.08*	.02	-.01	.05
宗教行動				.09*	.22***	.21***	.02	-.03	.09*	-.09*	-.05		.00	-.09*	.05	.00
現世利益					.01	.02	.01	.04	.04	.00	.08		.02	-.12*	.04	.03
慰霊				.09*	.18***	.14***	.06	.02	.04	.03	-.03		.01	.03	.00	.01
							.11*	.01	-.02	-.02	.01	-.07	.00	.06	-.04	.00
信仰実践				.18***	.04	.04	-.10**	-.12**	.06	-.12**	-.13***		.06	-.01	.01	.03
							-.07	-.17***	-.04	-.12**	-.07	.01	.07	.01	.06	.05
宗教観							.07	.13**	-.22***	-.02	.25***		-.08	.13**	.06	.08
向宗教性							.02	.26***	.06	.16**	-.02	.14*	-.18***	.11	.01	.08
加護観念							-.09	-.10*	.07	-.10*	-.17***		.04	.13**	-.10*	-.08
							-.03	-.06	.00	-.07	-.04	.03	.04	.08	-.02	-.09
靈魂観念							.27***	-.12*	.42***	.19***	.55***		.27***	-.15*	.27***	-.10
							.27***	-.20**	.17**	.03	.57***	.17**	.35***	-.18**	.24***	.03
死観 (上段は自己、下段は他者)													-.05	-.01	.20***	.02
恐怖と苦痛													.27***	-.14**	.18**	-.02
消滅													.06	.19***	.02	-.29***
													-.14**	.24***	-.01	-.11*
生の証													.31***	-.17***	-.02	.24***
													.01	.05	.06	-.01
逃避と未知													.02	-.01	-.04	.02
													.05	.06	.06	-.07
浄福な来世													-.06	.09	-.19***	.13**
													-.02	-.03	-.09	.07
集大成 (他者のみ)													.00	.01	-.09	.05
調整済み R ²	.02***	.00	.02**	.05***	.13***	.12***	.09***	.03***	.17***	.03**	.38***		.26***	.12***	.11***	.16***
							.12***	.05***	.04**	.02*	.29***	.09***	.24***	.13***	.11***	.05***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

別のみであり、女子のほうが大切な他者の死を「恐怖と苦痛」であると受け止めていた。宗教行動では、慰霊行動が「恐怖と苦痛」を和らげる方向に、信仰実践行動が「大切な他者は亡くなると消滅する」という態度を弱め、「大切な人の死は未知のものでその問題から逃避したい」という態度を低める方向に働いていることが示された。また、宗教観のうち、加護観念は他者の死観を規定するものではなかったが、向宗教性は「消滅」と「逃避と未知」を高める方向へ、靈魂観念は「恐怖と苦痛」を強めるけれども、その大切な人は亡くなっても「消滅」するのではなく、「浄福な来世」へと導かれると考え、その人の死は「生の証」であり「人生の集大成」であるという肯定的な死観にも影響していることが明らかとなった。

情動的共感性 性別はすべての共感性を規定しており、また、宗教教育は「感情的あたたかさ」を高め、「冷淡さ」を低める方向に影響を及ぼしていた。「感情的あたたかさ」については、靈魂観念と自己の死観の「生の証」がそれを高める方向に影響し、他者の死観の「恐怖と苦痛」は正の、「消滅」は負の影響を及ぼしていた。「冷淡さ」には、向宗教性と加護観念と自己の死と他者の死の「消滅」がこれを高め、靈魂観念と自己の死観の「生の証」、他者の死観の「苦痛と恐怖」が低める方向へ影響していた。また、「被影響性」をもっとも強く規定していたのは靈魂観念であり、死観（自己と他者とも）の「苦痛と恐怖」は正の、自己の死観の「浄福な来世」は負の影響を及ぼしていた。

自尊心 自尊心を規定しているのは、性別と3つの自己の死観（消滅、生の証、浄福な来世）、他者の「消滅」のみで、宗教教育の有無、宗教行動、宗教観は有意な標準編回帰係数が得られなかった。女子よりも男子のほうが自尊心が高く、死ねば消滅してしまうと考える態度は自尊心を低める方向に、自己の死を生証と捉える態度および浄福な来世を信じる態度は、これを高める方向に影響していることが明らかとなった。この結果は先行研究（渡部・金児、2004）と同様であり、肯定的な死観が自尊心を高め、否定的な死観は自尊心を弱めることが確認された。

考 察

本調査は、平成 24 年度に実施予定である「大学における宗教教育と死の準備教育の効果」の調査研究の予備調査として、主に本調査で使用する項目の精選を目的に、関西にある 4 つの私立大学の大学生 825 名を対象に行われた。重回帰分析の結果（表 6）から、大学における宗教教育は、信仰実践行動には影響を及ぼし、これを促進させるが、予想に反して宗教観や死観には直接影響していないことが明らかとなった。しかし、分散分析の結果から、男子では宗教教育を受けているほうが靈魂観念が弱いものに対して、女子では逆に強いことが示された。このことは、男子は宗教教育の内容を論理で捉えているものに対して、女性は情緒面で影響を受けていることを示している。全般に、男子よりも女子のほうが宗教的態度が濃厚であることの根底を示す結果であり、今後の宗教教育に重要な示唆を与えるものである。このことに関連して、他者の死観の分散分析からは、宗教教育を受けている場合には、女子は他者の死を「消滅」と考えないものに対して、男子は逆に「消滅」と見なす結果が得られたが、このことも上述の男子の合理・論理思考、女子の情緒思考を示すものと考えられる。

また、重回帰分析の結果から、信仰実践行動が向宗教性を高め、自己の死を「恐怖」や「消滅」ではなく、その問題から「逃避」しないという態度を醸成していることが示された。さらに、信仰実践行動は、大切な他者の死を「消滅」ととらえず、「逃避」しないという方向にも影響していた。自己の信奉する宗教が説く聖典や経典などを読んだり、おりにふれお勤めをしたりして、ふだんから宗教的な行いをしている学生において、望ましい宗教観と死観が形成されているということである。このことは、宗教的情操を育むうえにおいて単なる観念ではなく、実践を伴う教育が必要であることを示唆している。

自尊心を規定する要因は、性別と自己の死観（消滅、生の証、浄福な来世）であり、宗教教育の影響は認められなかった。これは、「肯定的な死観が自尊心を高め、否定的な死観がこれを弱める（渡部・金児、2004）」

という先行研究と一致した結果である。

しかし、情動的共感性については、宗教教育の効果が認められ、宗教教育を受けたことが「感情的あたたかさ」を高め、「感情的冷淡さ」を低める方向へ寄与していた。ただし、表6の結果から、「感情的あたたかさ」に大きく寄与しているのは「靈魂観念」（自己： $\beta = .27$ 、他者： $\beta = .35$ ）と自己の死観の「生の証」（ $\beta = .31$ ）であり、冷淡さには「消滅」（自己： $\beta = .19$ 、他者： $\beta = .24$ ）と「生の証」（自己： $\beta = -.17$ ）であった。このことから、先に述べたように、宗教教育が情動的共感性に直接影響を及ぼすというよりも、宗教行動や宗教観、死観の形成を経て、あたたかい共感性を育むというモデルが妥当であると考えられる。ただ、本稿では、大学別に宗教教育の効果に差が認められるか、については検討していない。その理由には、大学によって宗教関連科目を受講した人が少なかったこと、プロテスタント系大学と浄土真宗系大学における科目内容の違いなどについての情報が少なかったこと、が挙げられる。さらに、相愛大学では宗教関連科目が必修であるが、他の3つの大学ではそうではないことにも注意が必要であろう。これらの大学で宗教関連科目を受講している学生はもともと宗教的関心が高い人たちである、と考えられるからである。このことは、例えばB大学において信仰実践的行動が多くみられ、自尊心も他大学よりも高いという結果からも示唆される。

今回の調査研究における最大の成果は、相愛大学の宗教教育が受講生にとって、建学の精神に沿った望ましい影響を与え、他者へあたたかい気持ちを持って配慮するという「當相敬愛」の具現化が社会的態度上において果たされていることが示されたことである。調査対象者のうち、宗教関連科目の受講者の70.3%が相愛大学生であったということは、本研究における宗教教育の効果はほぼ相愛大学生の回答に起因していると言ってよいだろう。

以上の結果を踏まえ、次の研究では、宗教教育の有無だけでなく、その内容についても精査することで、大学の宗教教育が学生に対してどのような効果を及ぼしているのかを明確にすることができると同時に、今後の相愛大学における宗教教育のあり方を考える契機にもなると考える。

文 献

- Allport, G. W. 1966 The religious context of prejudice. *Journal of the Scientific Study of Religion*, 5, 447-457.
- Allport, G. W. & Ross, J. M. 1967 Personal religious orientation and prejudice. *Journal of Personality and Social Psychology*, 5(4), 432-443.
- Batson, C. D., & Ventis, W. L. 1982 *The religious experience: A social-psychological perspectives*. New York: Oxford University Press.
- Coersmith, S. 1967 *The antecedents of self-esteem*. San Francisco: W. H. Freeman.
- Crocker, J., & Wolfe, C. 1999 *Rescuing self-esteem: A contingencies of worth perspective*. Unpublished manuscript, University of Michigan.
- 石黒彰二・酒井亮爾・山田ゆかり 1985 高校生の宗教意識に関する研究-1 - 宗教教育の効果『禅研究所紀要』, 14, 303-322.
- 藤井美和 2004 世界保健機関高齢者 QOL 尺度 (WHOQOL-OLD) の信頼性と妥当性の検証 平成 14 年度『日本興亜ジェロントロジー研究報告』 144-151.
- 金児曉嗣 1997 『日本人の宗教性 - オカゲとタタリの社会心理学-』新曜社.
- 金児曉嗣・渡部美穂子 2003 宗教観と死への態度 大阪市立大学大学院文学研究科紀要『人文研究』, 54, 85-109.
- 金児曉嗣 2011 宗教とメンタルヘルス 金児曉嗣監修、松島公望・河野由美・杉山幸子・西脇良編『宗教心理学概論』141-163. ナカニシヤ出版.
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における情動的共感性の特質 筑波大学心理学研究, 2, 33-42.
- 川島大輔 (2005). 老年期の死の意味づけを巡る研究知見と課題 京都大学大学院教育学研究科紀要, 51, 247-261.
- 河野由美 2011 宗教と死 金児曉嗣監修、松島公望・河野由美・杉山幸子・西脇良編『宗教心理学概論』167-184. ナカニシヤ出版.
- Leary, M. R. 1999 The social and psychological importance of self-esteem. In R. M. Kowalski & M. R. Leary (Eds.), *The social psychology of emotional and behavioral problems*. Washington, D. C.: APA Books.
- Mehrabian, A., & Epstein, N. 1972 A measure of emotional empathy. *Journal of Personality*, 40, 525-543.
- 向井有理子・金児曉嗣・河野由美・渡部美穂子・岸川真理子・堀江尚子・宮崎弦太 2003 都市住民と村落住民の生活様式と価値観の特徴 (4) - 自

- 尊心と異文化への態度－, 日本社会心理学会第 44 回大会発表論文集, 728
-729.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton :
Princeton University Press.
- Stotland, E. 1969 Exploratory investigations of empathy. In L. Berkowitz
(Ed.), *Advances in experimental social psychology*, 4, New York :
Academic Press. Pp.271-314.
- Tafarodi, R. W., & Vu, C. 1997 Two-dimensional self-esteem and reactions
to success and failure. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 23,
626-635.
- 渡部美穂子・金児暁嗣 2004 都市は人の心と社会を疲弊させるか? 大阪
市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター『都市文化研究』, 3, 97
-117.